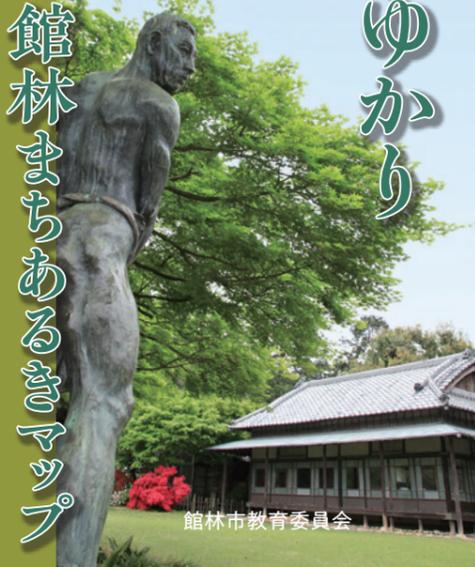


# 秋元家ゆかり

館林まちあるきマップ



館林市教育委員会

## 館林最後の藩主秋元家

秋元家は江戸時代に譜代大名として幕府を支え、最後の館林藩主をつとめた家です。鎌倉時代の武将宇都宮頼綱の子泰業が上総国周准郡秋元荘（千葉県君津市）を領し、その7代後の師朝の時から秋元を名乗ったといいます。

戦国時代末期の天文10年（1541）、政朝・景朝の代に武蔵国深谷（埼玉県深谷市）に移り、深谷城主上杉氏に仕えました。

景朝の子長朝は北条氏に屈しますが、小田原の役後に徳川家康に従属し、関ヶ原の戦いの功により慶長6年（1601）上野国総社（前橋市）に1万石を賜り、初代総社藩主となりました。

2代泰朝は日光造営奉行などをつとめ、寛永10年（1633）に1万8千石で甲斐国谷村（山梨県都留市）に移封となりました。

その後、4代喬知が寺社奉行や老中など幕府の重職をつとめ、宝永元年（1704）に5万石で武蔵国川越（埼玉県川越市）に移封となりました。喬知はさらに1万石を加増され、幕末まで秋元家は6万石を襲封しました。

7代涼朝も寺社奉行や老中をつとめ幕政を取り仕切りましたが、その辞職を機に明和4年（1767）

に出羽国山形（山形市）に移封となりました。弘化2年（1845）、10代志朝のときに上野国館林（館林市）に移封となりました。志朝が館林藩主の頃には幕末の動乱期となり、11代礼朝のときに新政府軍として戊辰戦争に参加しました。明治2年（1869）の版籍奉還で礼朝は館林藩知事となり、明治4年の廃藩置県で館林藩は終焉を迎えました。

館林市には秋元家の資料が数多くあります。元和元年（1615）の大坂夏の陣後に2代泰朝が徳川家康から拝領して秋元家の家宝となった「無之字槍」や、天保期から幕末までの幕府の記録である「奏者番手控」、10代志朝が藩領の記録として作成させた絵図「封内経界図誌」など、貴重な歴史資料として伝わっています。



無之字槍（市立資料館所蔵）



封内経界図誌（市立資料館所蔵）



奏者番手控（市立図書館所蔵）

## 秋元志朝と礼朝～幕末の館林藩～

秋元家10代志朝と11代礼朝が藩主をつとめたのは幕末維新の動乱期でした。嘉永6年（1853）にペリーが来航したのを受け、翌年の安政元年（1854）に館林藩は江戸湾警備を命じられました。安政2年に志朝は大筒を中心とした軍事演習を行っています。しかし、武備を整える必要だけでなく、同年に発生した安政江戸地震で江戸屋敷にも被害があり、山形にあった出羽分領の早魃も重なって、財政難に直面しました。

志朝は家中に対して安政4年から5年間の家禄削減と経費節減を直書で発し、さらに産業振興により財政健全化を果たしました。また、安政4年には藩校求道館を改編・拡充した造士書院を開設して藩士子弟の教育改革にも注力しました。



秋元志朝写真（市立資料館所蔵）

文久3年（1863）8月18日の政変で幕府と長州藩の対立が鮮明になると、館林藩内では尊攘派から幕府と長州藩の仲介を館林藩が請け負う幕長周旋が主張されました。一方、長州藩との内通を幕府に疑われてしまうとする慎重論の立場もあり、藩内対立の結果、尊攘派が優位に立ちました。しか

し、結果的に幕長周旋は失敗に終わりました。元治元年（1864）7月には長州藩が京都に攻め込む禁門の変が起き、幕府が長州征討を西南諸藩に命じる事態になりました。この頃、幕府は志朝が長州に内通していると疑い、藩主引退を求めました。そのため、藩内尊攘派が失脚して藩論は佐幕派に転じ、志朝は藩主を降りました。

志朝の跡を礼朝が継いだ後、慶応2年（1866）には薩長同盟が成立して倒幕運動が加速し、翌年には大政奉還がなされ、王政復古の号令が出されます。さらに明治元年（1868）に、新政府軍と旧幕府軍による戊辰戦争が起きました。



秋元礼朝肖像（市立資料館所蔵）

礼朝はこうした情勢を受けて藩論を勤王派に転じ、幕府と袂を分かちました。明治元年3月3日、勤王の意を示すために礼朝は上洛を目指しましたが、上洛決定の遅れを理由に新政府から謹慎を命じられました。3月29日、謹慎を解かれた礼朝は館林藩を戊辰戦争に加わらせ、9月の会津戦争まで官軍の一翼を担いました。

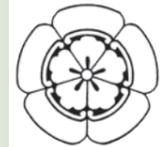
明治2年6月、戊辰戦争の功績により、礼朝は太政官から1万石の賞典を与えられました。さらに同月に版籍奉還が実施され、藩主は知藩事に改められ、礼朝は館林藩知事となりました。

## 秋元家略年譜（志朝以降）

| 元号(西暦)      | 当主 | 事項   |
|-------------|----|--|
| 天保10年(1839) | 志朝 | 志朝（秋元家10代）、家督を継ぐ。  |
| 弘化2年(1845)  |    | 志朝、山形から館林へ移封。  |
| 弘化4年(1847)  |    | 秋元家9代久朝、没す。館林藩校「求道館」開設。  |
| 嘉永3年(1850)  |    | 志朝、躑躅ヶ崎（つづじが岡公園）の花見をする。  |
| 嘉永6年(1853)  |    | ペリー来航。   |
| 安政元年(1854)  |    | 志朝、江戸湾警備を命じられる。  |
| 安政2年(1855)  |    | 領内の絵図「封内経界図誌」が完成する。江戸で大地震が起きる。                                   |
| 安政3年(1856)  |    | 志朝、藩政改革を行う。館林藩領赤生田村で大洪水が起き、志朝が村民を救済する。                           |
| 安政4年(1857)  |    | 館林藩校「求道館」を改編した「造士書院」開設。前年の洪水時における志朝の領民救助活動を称え、赤生田村民が「生祠秋元宮」をまつる。 |
| 安政6年(1859)  |    | 志朝、太田資始五男礼朝を養子とする。   |
| 万延元年(1860)  |    | 館林藩士岡谷荘三郎が条約批准の幕府使節団に随行し渡米。                                      |
| 文久元年(1861)  |    | 志朝、アメリカ公使館が置かれた江戸麻布の善福寺の警固を命じられる。                                |
| 文久2年(1862)  |    | 志朝、河内領内の天皇陵修復を願い出る。  |
| 元治元年(1864)  |    | 河内領内の雄略天皇陵を修復する。長州征討が起こり、志朝は幕府と長州間の調整（周旋）を行うが失敗し、幕府より隠居を命じられる。   |
| 慶応2年(1866)  | 礼朝 | 礼朝（秋元家11代）、家督を継ぐ。  |
| 慶応3年(1867)  |    | 礼朝、奏者番となる。   |
| 明治元年(1868)  |    | 幕府が大政奉還をし、王政復古の号令が発せられる。   |
| 明治2年(1869)  |    | 戊辰戦争が起こり、館林藩は新政府軍につき会津・仙台方面へ進軍する。                                |
|             |    | 版籍奉還により礼朝が館林藩知事となる。  |

| 元号(西暦)      | 当主 | 事項   |
|-------------|----|--|
| 明治4年(1871)  | 興朝 | 廃藩置県により館林藩が廃止され、館林県が置かれる。礼朝、戸田忠至二男興朝を養子とする。            |
| 明治7年(1874)  |    | 興朝（秋元家12代）、家督を継ぐ。                                      |
| 明治9年(1876)  |    | 興朝、館林小学校校舎新築費を寄付する。以後、15年間に渡り寄付を継続する。                  |
| 明治13年(1880) |    | 秋元家10代志朝、没す。   |
| 明治16年(1883) |    | 興朝、士族授産のため1万5千円を分与する。                                  |
| 明治17年(1884) |    | 秋元家11代礼朝、没す。   |
| 明治27年(1894) |    | 興朝、子爵となる。  |
| 明治29年(1896) |    | 旧藩士が旧館林城地の一部を秋元家に献納する。                                 |
| 明治35年(1902) |    | 旧館林城三の丸に秋元志朝顕徳碑が建立される。                                 |
| 明治35年(1902) |    | 興朝、毛利元功二男春朝を養子とする。                                     |
| 大正6年(1917)  | 春朝 | 秋元家12代興朝、没す。春朝（秋元家13代）、家督を継ぐ。                          |
| 大正7年(1918)  |    | 館林城三の丸に土橋門を復元し三の丸公園として町民に開放する。館林町肴町（本町二丁目）に秋元文庫が創設される。 |
| 昭和5年(1930)  |    | 東京駿河台の本邸から館林の秋元別邸へ庭石等を移す。                              |
| 昭和9年(1934)  |    | 秋元文庫を館林町に寄付し館林町立図書館が開館する。                              |
| 昭和23年(1948) | 順朝 | 秋元家13代春朝、没す。順朝（秋元家14代）、家督を継ぐ。                          |
| 昭和36年(1961) |    | 秋元家より秋元別邸の土地と建物が群馬県に売却されつづじが岡第二公園となる。                  |

**【コラム】** 秋元家4代喬知のとき、宝永4年（1707）から7年にかけて起こった山城国八瀬村（京都市左京区）と比叡山の境界論争がありました。喬知は老中として八瀬村勝訴の裁断を下し、その報恩として喬知を祀った秋元神社が建立されました。（現在は八瀬天満宮に合祀）



秋元家家紋  
(秋元木瓜)

## ACCESS

**お車でのアクセス**

|   |  |
|---|--|
| <p><b>前橋IC</b><br/>関越自動車道 約8km(約5分)</p> <p><b>高崎JCT</b><br/>北関東自動車道 約30km(約20分)</p> <p><b>太田桐生IC</b><br/>一般道 約15km(約30分)</p> <p><b>館林市内</b></p> | <p><b>浦和IC</b><br/>東北自動車道 約40km(約25分)</p> <p><b>館林IC</b><br/>館林ICから約3km(約10分)</p> <p><b>宇都宮IC</b><br/>東北自動車道 約60km(約50分)</p> <p><b>館林IC</b><br/>館林ICから約3km(約10分)</p> |
|---|--|

**電車でのアクセス**

|  |  |
|--|--|
| <p><b>浅草駅</b><br/>東武伊勢崎線<br/>特急で約60分</p> | <p><b>館林駅</b><br/>東武伊勢崎線にて、浅草駅から特急で約60分<br/>伊勢崎駅から約60分</p> |
|--|--|

## 館林最後の藩主秋元家ゆかり館林まちあるきマップ

編集・発行 館林市教育委員会 文化振興課 市史編さんセンター 〒374-0018 館林市城町2-3 TEL 0276-76-7651

〈表紙写真〉秋元春朝投網像と旧秋元別邸  
 〈協力〉つづじのまち観光課 館林市立図書館 館林市立資料館 尾曳稲荷神社 永明寺 法輪寺  
 〈写真提供〉中山健一 SATO-NUMA.JP

## 明治維新後の秋元家

秋元家は明治維新後、華族に列せられました。明治4年（1871）7月の廃藩置県により館林藩は館林県と改まり、礼朝は知藩事の任を免じられて東京に移りました。ここに館林藩の歴史は幕を閉じました。礼朝はこの時隠居し、養子興朝が家督を継ぎました。その後、明治9年に志朝、明治16年に礼朝が没しています。

館林を離れても秋元家は館林との関係をもち続けました。秩禄処分です生活が困窮した旧館林藩士のために、興朝は明治16年に困窮士族救済案として全国にいる旧藩士のうち困窮している者へ1,000円の補助金を出しました。さらに、旧藩士の就産事業費用を旧臣村山具胆に託し、城沼水産事業がはじめられました。また、旧藩士子弟への奨学金も出しました。

秋元家への恩義を篤く感じていた旧臣らは三の丸など旧館林城の土地の一部を買い戻し、明治27年に秋元家へ献納しました。興朝が大正6年（1917）に没すると養子春朝が家督を継ぎ、所有する三の丸を公園にして開放したり、秋元文庫を創設したりするなどして、引き続き館林との関わりを強くもちました。



**秋元家歴代当主（江戸時代）**

| 当主(藩主)名 | 生没年       | 城地    | 石高      |
|---------|-----------|-------|---------|
| 初代 長朝   | 1546~1628 | 総社    | 1万石     |
| 2代 泰朝   | 1580~1642 | 総社・谷村 | 1~1.8万石 |
| 3代 富朝   | 1610~1657 | 谷村    | 1.8万石   |
| 4代 喬知   | 1649~1714 | 谷村・川越 | 1.8~6万石 |
| 5代 喬房   | 1683~1738 | 川越    | 6万石     |
| 6代 喬求   | 1716~1744 | 川越    | 6万石     |
| 7代 涼朝   | 1717~1775 | 川越・山形 | 6万石     |
| 8代 永朝   | 1738~1810 | 山形    | 6万石     |
| 9代 久朝   | 1792~1847 | 山形    | 6万石     |
| 10代 志朝  | 1820~1876 | 山形・館林 | 6万石     |
| 11代 礼朝  | 1848~1883 | 館林    | 6万石     |

